

知識は身を守りいのちを救う

それぞれの

人生が

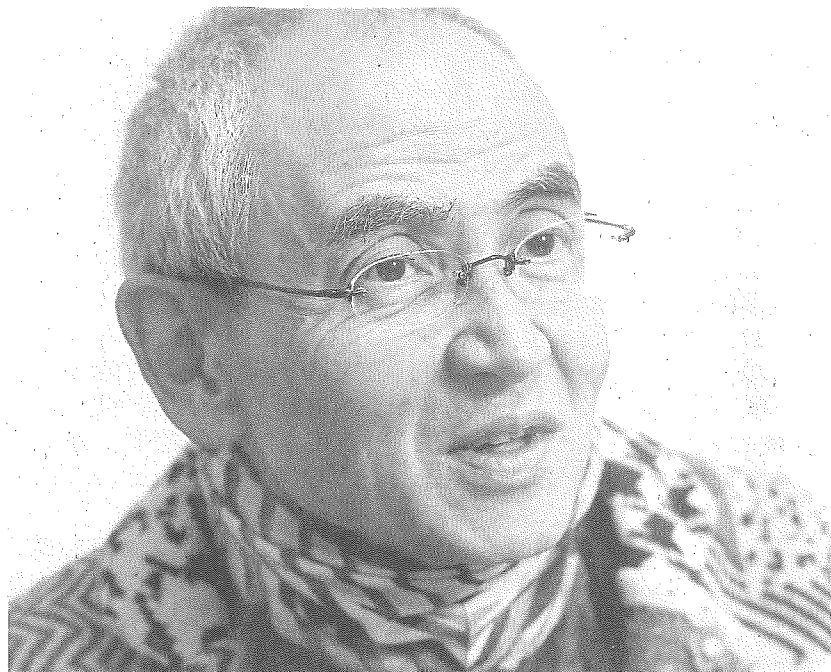
第5部

地球科学者 (京都大名誉教授)

鎌田 浩毅さん (67)

これからについて「市民への啓発教育と、たとえば災害が起きる前に頭より先からだがザワザワと反応するような『身体論』も研究したい」と話す鎌田浩毅さん(京都市中京区)

撮影・山本健太



大震災を機に、啓発・教育にかじ

地球科学の伝道者である。分りやすく面白く、本質を伝えることに力を尽くす。マグマの色の赤い草シヤンをはじめファッションに気を配るのは、学生や市民に興味を持ってもらうためだ。

「知識は身を守り、いのちを救う力がある」「学問は人を幸せにする」。紆余曲折を経て到達した確信である。

鎌田浩毅さんは半生を振り返り、「落ちこぼれでした」と率直に話す。東京大理科2類に進むも、打ち込めるものがなかなか見いだせず、苦悶した。サークルは生態学調査

や化学実験、点字、心理学を掛け持ちし、「自分がし」を続けた。数学で0点を取り、学内進学振り分けで成績が足りず、希望した医学部医学科に進めず、興味のなかった地質鉱物学科へ。

卒業したら、すぐに就職しようと思っていた。だが、1979年の第2次石油ショックの前で民間企業の募集は少なかった。「地学から足を洗おう」と国家公務員試験を受験。意図した行政職ではなく研究職で採用され、通産省(現・経済産業省) 地質調査所の配属になった。

入所したものの「やる気になくてがらがらしていた」1

年目の冬、地熱探査の国家プロジェクトの対象地域を見て来るようにと言われた。活火山・阿蘇山に向かい、現地で岩石や火山灰など実物教育をしてくれたのが、調査所の先輩で世界的な火山研究者の故・小野晃司さんだった。

「僕の拙い知識に合わせ、教え方がうまくてすごく面白かったです」。小野さんから薦められる論文を読み、国内各地のフィールドワークに付いていった。「弟子入りしてからは厳しかったけど、人生を切りひらいてくれた恩師です」としのぶ。

以来、鎌田さんは阿蘇山の北に位置する地域の地質を15年間かけて調査。集大成として5万分の1縮尺のカラード質図「官原」を世に出した。また、88年から2年間、米国内務省のカスケード火山観測

所に派遣され、世界でトップクラスの各国の火山学者と交流し、火山学の研究を深めた。

鎌田さんがアウトリーチと呼ぶ市民への啓発と教育の大切さを感じたのは、95年の阪神淡路大震災の震災調査で被災地の人から「関西には地震が来ないと思っていたのに」と聞いた時。「関西は近畿トライアングルといって活断層の巣で、学者は大震災の前から一生懸命伝えていました。でも地元の人々には全然伝わっていないことが分かりました」

授業やテレビで解説する中で日々痛感したのは啓発と教育の役割の重要性。「いくら伝える努力をしても結果として伝わらなかったら、人が亡くなってしまふ」

約500人の世界的火山学者に読んでもらうために英語の論文を書いて国際学術雑誌に掲載されるより、学生や一般市民に向けた活動に力を注ぐことかじを切った。「学問一つの分野で1人ぐらいは、啓発と教育に熱心に取り組む学者がいてもいいはずです」

12年前の東日本大震災以後、日本は「大地震動の時代」に入ったと強調する。「南海トラフ巨大地震は2030年から40年にかけて起きる可能性が高い。被災者は総人口の半分に当たる約6千万人、政府の試算では被災額は東日本大震災の10倍に当たる約220兆円に上る甚大な被害と予想されています」と警鐘を鳴

らす。

富士山をはじめ国内に111カ所ある活火山の噴火、首都直下型地震への備えも欠かせないという。もう一つは温暖化への対応。「脱炭素の取り組みも大事です。ただ、火山の大噴火が起きたら地球が寒冷化する可能性も併せて考えておかねばなりません」と指摘する。

直近の出来事を見るだけでなく、「長尺の眼」で物事を見る大切さを提言する。「地球科学も人生も」と。

生き方で大事にしていることを尋ねた。「自分が常に心を開いていれば、いいものが来ます。隕石は困りますが」とユーモアも交え、「いいものは必ず人が持って来てくれます。だからプラス思考で地球と人生の偶然を楽しむ心を持ち続けたい」と、培ってきた信念を言葉にした。

(鈴木哲法)

第5部おわり